■研究発表論文

# 大正・昭和初期の京都府間人における東山公園設立経緯と谷源蔵の考え

The Establishment Process of Higashiyama Park in Taiza, Kyoto and Thinking of Genzo Tani as a Founder

水内　佑輔*　　粟野　隆**

*Yusuke MIZUUCHI　Takashi AWANO*

Abstract: Higashiyama Park in old Taiza Town in the Tango region of Kyoto Prefecture is a private park built by Genzo Tani in the Taisho-Early Showa period. This study clarifies the establishment process, design and way of use of Higashiyama Park which was when the urban park system was established by landscape architecture. As a result of document analysis, Higashiyama park was made as a contribution to the local community where Tani was born. Parks have been selected as a way of contributing to the public, and were considered as recreational places for increasing public health. The Japanese garden style was adapted to Higashiyama Park, although Tani knew of modern urban parks in other areas of Kyoto and Osaka. The park concept was affected by Maruyama Park (Kyoto) derived from pre-modern scenic places. In his idea, establishment of the park was not a purpose but a mean of contribution to his birthplace. Hence, usage was important requirements for Higashiyama Park and the restaurant of the park were considered as appropriate to urban parks. Tani offered a recreational place, however, Higashiyama park is no longer existence now by the snow disaster on 1963 after Tani was dead.

Keywords: *Higashiyama Park, private parks, local community*
キーワード：東山公園，私設公園，地域社会

## １．はじめに

### （１）研究の背景と目的

京都府丹後地方の旧間人町[1]では，大正・昭和初期にかけて「東山公園」が設立された（図－1）。後述するが間人出身の貿易商・谷源蔵により郷土への貢献の一環として設けられた私設の公園である。現在，東山公園は都市公園指定の対象ではなく，公園としての形も留めていない。

そもそも，日本において公園は近代以降に特有の空間である。近代都市の建設が志向される中でその一部分としての位置付けから，明治中期の東京市区改正条例を起点に，旧都市計画法制定（1918）や関東大震災（1923）からの復興などのエポックを経つつ，大正・昭和初期に公園行政の揺籃を見，現在に直接的に繋がる近代都市公園の空間モデルやシステマチックな配置理論などの制度的構築がなされた。ただし，制度的起点としては，明治６年太政官 16 号（1873）に拠る通称太政官公園がある。この達が土地制度の近代化を動機としている点で公園は近代的空間といえるが，その実，近世由来の遊観地や景勝地，城址の受け皿としての意味を持っており，ただちに近代都市公園が広まったわけではない。ここで強調したい点は，大正・昭和初期の専門的職能による制度的構築以前に公園と呼ばれる多種多様な空間が広がっていたということである[2]。

当時の公園をめぐる状況について丸山宏[3]が明らかにしたところによると，公園制度の構築を準備していた内務省衛生局の 1919 年の公園調査[4]においては「私園」が調査の対象とされており，1921 年の調査はまさに「公園私園調査」であった。野間守人[5]も私有地かつ民間が管理する公園の存在を示し，関倫三郎[6]も雑誌『庭園』上での全国公園調査において私設の公園の存在を示す。上原敬二[7]も公園とその制度を考究する中で，必ずしも行政のみを設置・経営主体としていない。さらに，公園の制度的構築は，当時の状態の批判と共になされており[8]，すなわち当時の公園とそれを取り巻く社会状況そのものが，近代都市公園制度を規定していった点も少なからず存在する。この観点からすれば，公園史の拡充や今後の公園のあり方を考える上でも，私設公園[9]等への目配りもまた重要となろう。しかし，特に私設公園は公園行政上把握が難しく，例えば前島康彦らによる『日本公園百年史』[10]や佐藤昌の『日本公園緑地発達史』[11]などにおいても寄付されたものが部分的に示されているものの概略の紹介のみに留まり，事例的蓄積が必要な状況にあるといえる。

東山公園には設立に関する資料が残されており，実際の空間と言説の双方から検討しうる貴重な事例である。そこで本研究では大正・昭和初期における東山公園の設立の経緯やその意図，空間の意匠や利用形態の把握を行うこととした。その上で，東山公園の設立にあたっての谷源蔵の考え方について考察を行った。

### （２）研究の方法

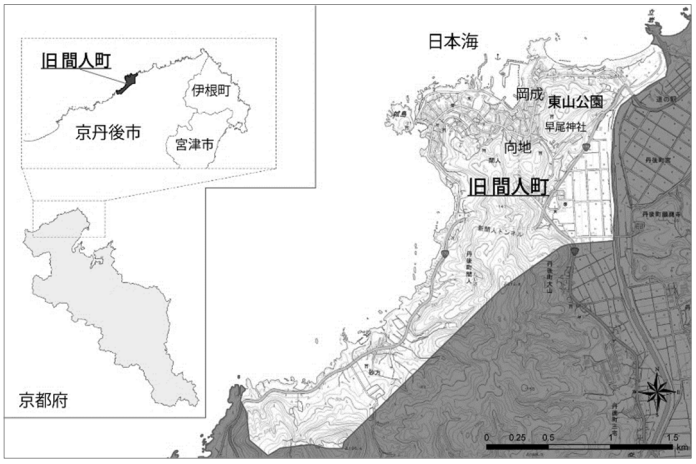
資料収集・調査，公園跡地踏査，親族・近隣住民への聞き取りによって研究を行った。東山公園にかかわる資料に，谷源蔵自筆の冊子がある（以下，顛末記[12]）。表紙に東山公園と書かれ，B5 版の罫紙 183 頁，約 28000 字の記述がある（図－2）。設立の動機，敷地買収の経緯及び略図，植栽樹種，開園式出席者及び祝辞，新聞・町報の書き写しなどが載せられている。内容に加え，谷源蔵は自分史といえる日誌を８冊残している[13]点から自筆と判断した。設立の経緯，管理運営形態については顛末記から読み取り，ほかに谷源蔵関連の文献から補足した。意匠については，顛末記，聞き取り時に閲覧・撮影した地域関係者が所有する東山公園の写真，現地踏査[14]，地域関係者への聞き取り，航空写真，植栽樹種発注元の発行資料を収集・検討した。現地踏査，聞き取りは 2016 年７月８日，８月８日に実施した。

## ２．東山公園設立の経緯

### （１）間人について

東山公園が立地した間人は，京都府京丹後市丹後町の中心地区である（図－1）。和名抄にある間人郷に比定され，慶長検地郷村

*東京大学大学院農学生命科学研究科　**東京農業大学地域環境科学部造園科学科




図－1　間人地区の地図

表－1　谷源蔵の略譜

| 年月日 | 出来事 |
|---|---|
| 1872/9/4 | 相見幸八(三代目)の5男として誕生 |
| | 谷栄吉家の養子へ |
| 1888/12/21 | 大阪の羅紗商松村商店（松村真平）へ丁稚奉公 |
| 1891/1/1 | 手代番頭へ |
| | アメリカ旅行を計画、東洋学館で英語を勉強 |
| 1893/5/14 | 大阪教会（プロテスタント系）で受洗 |
| 1895/4/10 | 谷商店として貿易事業着手、露領ウラジオストクへ |
| 1899/12/5 | 入江玉子と結婚 |
| 1904/2/22 | 日露戦争勃発、第三軍九師団十九連隊に従軍 |
| 1905/3/29 | 除隊し、敦賀へ帰還 |
| 1905/9/5 | 日露講和条約締結後、再びウラジオストクへ 大連で雑貨・果実店創設 |
| 1909 | 間人に忠魂碑建立 |
| 1909 | シベリアの原始林からポプラ、ドロノキを伐採、マッチの軸木材の輸出 |
| 1912/10/※ | 母・相見濱子死去 |
| 1917/7/8 | 妻・玉子死去 |
| 1920/4/29 | 間人敬老会設立 |
| 1921 | 東山公園着工 |
| 1924/5/29 | 間人小学校に奉安殿建設 |
| 1924/9/12 | 内藤賤女と結婚 |
| 1932 | ソ連政府が木材輸出を禁止したため、ウラジオストク退去。満洲へ進出 |
| 1957/2/15 | 間人隠居所で死去 |

帳に「間人村」と出る[15]。1899 年の町村制施行により間人村に，1921 年に間人町となった。1955 年に周辺 4 村と合併し丹後町を設置，2004 年に周辺 6 町と京丹後市を設置した。1921-54 年までは人口 3000 人台を推移していた。谷源蔵の生家の相見幸八家は，間人のうち岡成地区にあり，他に谷・向地・小泊・小間東・小間西・砂方がある。古くから港が開かれ，丹後海岸の海上交通の中心であり，漁業が発達した地域である。

### （2）谷源蔵の略歴

谷源蔵の略譜を表－1 に示す。1872 年 3 代目相見幸八の 5 男[16]として生まれ，谷栄吉家の養子となった。大阪の松村商店への勤務後，1895 年谷商店として独立，ウラジオストクに店舗を構え貿易商として成功した。愛郷の志篤く，郷里のために私財を投じて町民の喜びを自分の喜びとしたとされ，1909 年に忠魂碑建立，1920 年の敬老会の創始，1922 年の奉安殿の建設，無縁供養塔建設などを行った[17][18]。郷土研究も行い，1947 年からは「間人民族の研究」「間人の名称の考証」が間人町報に連載されていた。

### （3）東山公園設立の動機

顛末記には公園建設の動機と立地について記されている。直接の背景として，1912 年に死去した母･濱子への供養が挙げられる。1919 年頃より銅像を建設することを実兄の 4 代目相見幸八と相談し，稲荷山の相見幸八家所有の山林を設置場所とし，同年冬頃に地均し，石垣の建設を竣工したとされる。

母の銅像建設の着想と同時に以下のように，地域社会からの反応を気にし，地域社会への貢献の必要を感じたとされる。「我の銅像碑石建設 他意なきも他人は何と思ふや…自分の哀心を察せない人等には虚栄を衒ふと曲解されるか 我の母を想ふ如く社会民衆を顧みる要ありと痛感した」[19]

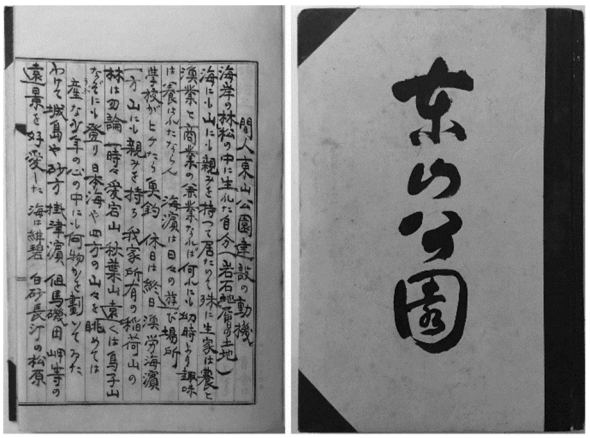



図 - 2　顛末記（2015 年 10 月 17 日に著者が書店より入手）

貢献の条件として「可成一般 村民に利用されるもの　可成 永続すべき柄の事のもの」との考慮がなされ，いくつかの選択肢があったようであるが，最終的に公園と決定したとされる。また，立地に関しても当初より東山に設定していたわけではなく，間人の中心地としようとしたが，景勝の地という条件に合致する土地がなく，景勝という観点から東山に定めたと記述される。

「間人の中央と思意したるも勝形の地なく…岡成の東山一帯西南に面し公園にふさはしき唯一の土地 此処を選定した 地勢が自然と自分の生まれた岡成の地となさしせめた又奇なり」[20]

これらからは，地域社会に資すること，永続するものとして公園が選択されていることが判明する。谷源蔵は公園建設時の支出を厭っておらず，経済的観点から平坦地にある間人の中心部の土地買収を断念したのでなく，公園の立地は景勝地である必要があるという谷源蔵の考えを指摘できる。

## 3．意匠や管理運営から見る東山公園の実態

### （1）造成の過程

谷源蔵は，1920 年 6 月 10 日より東山公園の敷地の用地買収を開始し，1926 年 4 月 20 日に竣工，4 月 25 日に東山公園の開園式を行った。その後，1926 年冬から 1927 年春にかけて拡張したとされ，造成は 2 回に渡って行われた。地均しを上谷甚四郎に，水谷政治[21]を造園技手に任命した。本研究では，谷源蔵が第一工事，第二工事とする開園前に行われた 2 回の造成を設立期とする。

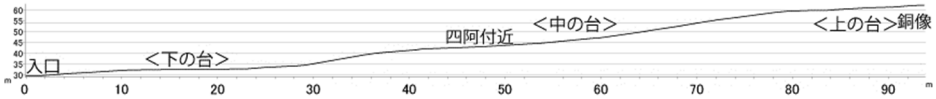
谷源蔵は「大體は庭園式である」とし，水谷を「数度上京させて，京洛の名所古刹を視察させ 瓢箪池や清瀧 萩の臺 四阿 家等の築造に取りかゝり各種の珍木を移植して全く公園の體裁を供へた」[22]と述べる。後に検討するが，公園の建設にあたって，和風の庭園式を選択し，そのモデルの探求へ造園技手・水谷を京都へ視察させている。また，植栽樹木は，「攝津國川邊郡山本村花王園」に発注したと記述される。山本村は日本 4 大植木産地の 1 つの伝統的植木産地である[23][24]。このうち花王園は 1927 年の全国著名園芸家総覧[25]において存在が確認される有力な植木屋であった。

### （2）設立期の東山公園の意匠

図－3 に概略図を示すが，顛末記にある公園面積 1626 坪（約 5375m$^2$）との記述から公園区域を推定した[26]。他に「瓢箪池」へ噴水を設置したとの記述や「廣場を築造し得たれば」「廣場藤棚の下」などの記述があり，これらが設えられていたと考えられる。庭石と植栽樹木に関しては詳細なリストが作成されており，大庭石 1136 個，中庭石 599 個，小庭石 465 個が使用されたと記述されている。植栽樹木については表－2 に示したが，桜を中心とした植栽がなされている。

入手した古写真[27]と現地踏査を照らし合わせつつ，公園の形態を把握したい。聞き取りにおいては，現在の地域住民には東山公

図－3　東山公園の概略図




図－4　東山公園断面図　図－3の破線部分　3つの平坦地が確認できる。

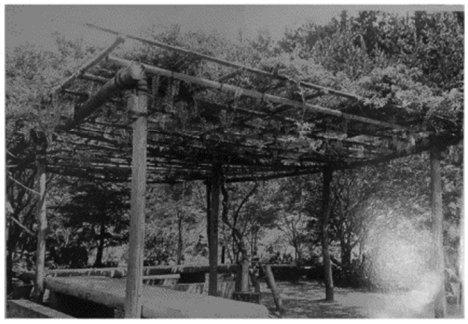
図－5　東山公園の入口写真

図－6の入口碑が特定出来る。

図－6　現在の東山公園の入口写真

2016年8月8日著者撮影

図－9　庭石



図－10　藤棚

図－7 現存の庭石

図－8 公園記念碑

図－11　瓢箪池と噴水

鶴と亀の銅像も確認できる。

図－12　東山公園内の桜と提灯

写真左隅の藤棚から，四阿周辺からの撮影と考えられる。

図－13　現在の相見濱子銅像

2016年8月8日著者撮影

図－14　相見濱子銅像（図－9）序幕式

読経時に撮影したことが顛末記に記される。

図－15　東山公園から日本海への眺望

園は3つのゾーンに分かれていた認識があるとの言があったが，現地踏査の結果，それは地形に沿った区分であり，銅像部分の平坦地を「上の台」（図－13，14），瓢箪池，間人皇后記念碑部分の平坦地を「中の台」，その下部の平坦地を「下の台」と通称していたことが分かった（図－4参考）。谷源蔵は，銅像がある「上の台」を公園とは区別して認識していたが，地域社会において両者に区分は無く，一体として捉えていた。

公園入口碑が写る古写真（図－5）がある。現在も碑が存在しており特定可能であった（図－6）。また，古写真からは庭石，藤棚（図－5右奥）の存在が確認できることから，この場所が顛末記に出てくる「廣場」と比定できる。地域では下の台と通称されていた場所である。現在，入口碑の横は宅地化しているが，聞き取りによればこの碑は動いておらず，下の台の一部が宅地化したとのことであった。

表－2　顛末記に記された植栽樹種及び，花王園目録対応一覧

| 和漢名 | 売み仮名（参考） | 本数 | 花王園 | 和漢名 | 読み仮名（参考） | 本数 | 花王園 | 和漢名 | 読み仮名（参考） | 本数 | 花王園 | 和漢名 | 読み仮名（参考） | 本数 | 花王園 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 青木 | アオキ | 11 | ◎ | 櫻 | サクラ | 500 | ◎ | 東京芝 | トウキョウシバ | | ◎ | 牡丹櫻 | ボタンザクラ | 15 | ◎ |
| あかしや | アカシア | 65 | | 柘榴 | ザクロ | 2 | ◎ | 斑入桅子 | フイリナデシコ | 20 | | ポプラ | ポプラ | 200 | ◎ |
| 紫陽花 | アジサイ | 9 | | 茶梅 | サザンカ | 109 | ◎ | 南天 | ナンテン | 2 | | 本垂柳 | ホンシダレヤナギ | 3 | ◎ |
| あて檜葉 | アテヒバ | 35 | | 皐月 | サツキ | 151 | ◎ | 花あかしや | ハナアカシア | 10 | | 槇 | マキ | 115 | ◎ |
| 一行寺 | イチギョウジ | 140 | ◎ | 薩摩杉 | サツマスギ | 117 | ◎ | 鼠モチ | ネズミモチ | 20 | | 柾木 | マサキ | 2 | |
| 無花果 | イチジク | 3 | | 百目紅 | ヒャクジツコウ | 24 | ◎ | 野村 | ノムラモミジ | 140 | ◎ | 松 | マツ | 4 | ◎ |
| 銀杏 | イチョウ | 20 | ◎ | 椎 | シイ | 2 | | 匍栢杉 | ハイビャクシン | 115 | ◎ | 丸葉柘植 | マルバツゲ | 20 | ◎ |
| 岩躑躅 | イワツツジ | 50 | ◎ | 枝垂柳 | シダレヤナギ | 18 | ◎ | 萩十二種 | ハギ | 102 | ◎ | 御車返 | ミクルマガエシ | 10 | ◎ |
| 梅 | ウメ | 2 | ◎ | 紫木蓮 | シモクレン | 4 | ◎ | 白木蓮 | ハクモクレン | 4 | ◎ | 木槿 | ムクゲ | 12 | ◎ |
| 黄金檜葉 | オウゴンヒバ | 7 | ◎ | 釋木 | シャカギ | 30 | ◎ | 花菖蒲 | ハナショウブ | 10 | ◎ | 木犀 | モクセイ | 69 | ◎ |
| 貝塚伊吹 | カイヅカイブキ | 51 | ◎ | 千重椿 | センヨツバキ | 4 | ◎ | 花寄株 | ハナヨセカブ | 20 | ◎ | 木蓮・木蘭 | モクレン | 10 | ◎ |
| 燕子花 | カキツバタ | 14 | ◎ | 大王松 | ダイオウマツ | 4 | ◎ | 薔薇 | バラ | 80 | ◎ | もちの木 | モチノキ | 9 | ◎ |
| 樫 | カシ | 2 | | 泰山木 | タイサンボク | 5 | ◎ | 萬代杉 | バンダイスギ | 110 | | 木斛 | モッコク | 8 | ◎ |
| 櫻 | カナメモチ | 200 | ◎ | 大輪扼子 | タイリンクチナシ | 25 | ◎ | 彼岸桜 | ヒガンザクラ | 10 | ◎ | 樅 | モミ | 17 | ◎ |
| 挾竹桃 | キョウチクトウ | 8 | ◎ | 多行松 | タギョウショウ | 4 | ◎ | へだら | ヒサカキ | 3 | | 楓 | モミジ | 20 | ◎ |
| 霧島躑躅 | キリシマツツジ | 117 | ◎ | 玉伊吹 | タマイブキ | 147 | ◎ | ヒマラヤシーダー | | 5 | ◎ | 桃 | モモ | 101 | ◎ |
| 金木犀 | キンモクセイ | 13 | ◎ | 千重椿 | チエツバキ | 4 | ◎ | 平戸 | ヒラドツツジ | 247 | ◎ | 八ツ手 | ヤツデ | 143 | ◎ |
| 銀木犀 | ギンモクセイ | 4 | | 矮檜葉 | チャボヒバ | 8 | ◎ | アテ枇杷 | ビワ | 10 | | 山櫻 | ヤマザクラ | 150 | ◎ |
| 草柘植 | クサツゲ | 20 | ◎ | 茶寄株 | チャヨセ | 30 | ◎ | 藤 | フジ | 8 | ◎ | 山吹 | ヤマブキ | 7 | ◎ |
| 樟樹 | クスノキ | 10 | | 朝鮮桅子 | チョウセンクチナシ | 270 | ◎ | 富士峰茶梅 | フジミネサザンカ | 16 | ◎ | 吉野櫻 | ヨシノザクラ | 165 | ◎ |
| ぐすまき | グスマキ | 3 | | 朝鮮芝 | チョウセンシバ | | ◎ | 鼈甲柘植 | ベッコウツゲ | 30 | ◎ | 吉野杉 | ヨシノスギ | 50 | ◎ |
| 月桂樹 | ゲッケイジュ | 3 | ◎ | 栂 | ツガ | 19 | ◎ | 紅櫻 | ベニカナメモチ | 71 | ◎ | ライラック | ライラック | 20 | ◎ |
| 高野槇 | コウヤマキ | 12 | ◎ | 柘植 | ツゲ | 224 | ◎ | 菩提樹 | ボダイジュ | 10 | | 羅漢槇 | ラカンマキ | 13 | ◎ |

瓢箪池については，噴水とともに撮影された古写真（図－7）が存在する。池部分の痕跡の特定は可能な状態であったが[28]，詳細な形態に関しては判然としなかった。古写真からは鶴と亀の置物の存在が確認できる（図－11 中央付近）。顛末記には多数の庭石の使用の記述があり，古写真においても庭石が確認でき（図－5，9），現地踏査においては個別の特定は難しかったが，その名残と思われるものが確認された（図－7）。また，公園建設記念碑も現存し，厳山（谷源蔵の号）記念とあり，他に工事担当者として義兄・上谷繁太郎，甥・相見幸八（5 代目），甥・相見良伯ら親族の名前，造園技手として水谷正治の名前がある（図－8）。

東山公園において著名な藤棚（後述）の古写真があるが（図－10），現地踏査でその存在は確認されなかった。また，谷源蔵は「地勢」から公園の場所を選んだが，東山公園は間人の東側に立地する稲荷山の西側斜面に立地している。このため当時は東山公園から日本海や旧間人町を望むことができた（図－15）。

**（3）植栽樹木**

植栽樹種については，東山公園開園の 2 年後，1928 年 3 月に花王園から発行されている『植物目録』[29]との対応関係を含めて，表－2 に植栽樹木の一覧を示した。紅櫻（ベニカナメモチ），茶梅（サザンカ）など花王園『植物目録』に記載される特徴的な和漢名が顛末記にも引き継がれており，影響が窺える。

設立期においてはサクラ（顛末記・櫻樹，図－12），カエデ（楓樹）が中心に植栽されており，それぞれ 310 本と 210 本を植樹したと記述されている。また，「大部分は山本より買入れたが…當村附近の庭樹も取り寄せ…砂方戸倉山より二本の低き老松樹を移植」とされるように，例外を除き基本的に山本村花王園からの購入であることが判明する。

谷源蔵は「庭園式」とするが，顛末記の植栽リストからは，あかしや，月桂樹，ヒマラヤシーダー，薔薇，ポプラ，ライラックなど洋風の樹種の存在もある。このうち，ポプラについては谷源蔵が材として扱っていた経験があり（表－1），本数としても大量に植栽されている。ただし，ポプラは造成の最初期において「根占用樹」[30]として記載があり，苗樹 100 本を植栽したとある。谷源蔵によれば，公園地はもともと「禿山」「野原荒蕪地」であったとされるが[31]，ポプラは『植物目録』において「きわめて痩薄なる地にても能く成長」として紹介されている[32]。緑化を目的とした植栽ではないかと推察され，同時に東山公園が「荒蕪地」であったことが類推される[33]。他にヒマラヤシーダー，月桂樹について『植物目録』を参照した場合，「記念樹好適品」として示されている。また，『植物目録』の表紙は薔薇であり，掲載量が最も多い花王園の主力商品であった。ライラックについては「芳香馥郁」というキャプションがあり，「志那より航載…庭園として優雅」と紹介される。樹種の重なりや特徴的な和漢名など，花王園からの強い影響が推察される。一方で，『植物目録』では当時プラタナスや百合樹が「欧米にては遊園公園又は道路の並木に最適」として紹介されているが，これらは植栽されていない[32]。

このほか，顛末記には移植後の定着率についても記述されており，三割が「枯凋」[34]したとされる。

**（4）拡張期以降の東山公園の意匠**

1926 年 4 月 25 日の開園式の後から，1929 年 10 月にかけて第三工事と称する拡張を行う。顛末記には「自分が餘りに世間を知り過きるので所謂京阪は愚外國の公園を見てゐるので何か足らぬ氣のする」というその背景が述べられている。

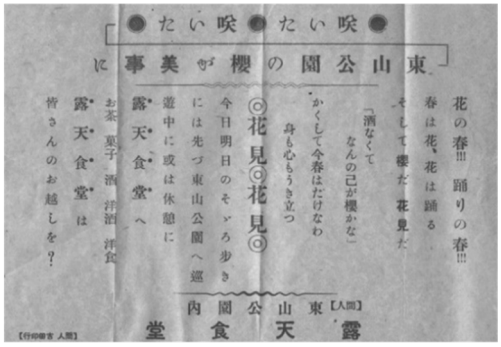
土地を買収し，水呑谷山麓[35]から早尾神社への連絡通路を開通し（図－3）“櫻岡大路”と命名した。また，“三笠桃山”と命名した場所には，桃，杏，梨を植樹している。他に「樹木や花卉だけでは物足りぬ」とし，「史蹟保存」[36]の一環として地域に所縁の伝説を記念するべく，具体的には間人皇后中宮殿址記念碑，五輪塔「飛鳥朝」，足利時代領主荒川武蔵守記念碑，間人郷先人碑等の建立が行われた。毎年 4 月頃には桜の名所となり，「東山公園は四月から十月までが觀る時季」と記述され，モクレン，桃，藤棚のフジ，ツツジ，アジサイ，タイサンボク，キョウチクトウ，ハギ，キキョウ，サザンカなどの花を楽しむように設えられた。一方，「冬は全くの冬籠り見る影もない惨たるもの」[37]と記述されることからも，花の彩や香りによって地域住民の目を楽しませることを重視していたと思われる。

また，1930 年の花見の際には，「間人の公園の櫻も僅かで見ばれがしない」との批評を聞いたと記述される。ただし，「彼岸櫻 吉野櫻 山櫻 牡丹櫻 八重櫻の五種類があり，一時に花咲かぬので見晴らせないのだ」と納得しており，「他日 500 本の櫻の開花した暁にはその荘観や思い量られる」と他日を期し，一面に見下ろす桜の風景の実現を目指している。

このように桜を大量に植栽し，東山公園を花見の名所として仕立て上げようとしていたが，1932 年 4 月 16 日の大阪朝日新聞京都版では『奥丹の花便り』として 7 ヶ所の名所の 1 つとして「東山公園の櫻」が取り上げられている。「日本海の荒風に樹木は風流を極め花はことによく磯で砕ける夫婦波や沖の小舟を眺めての鑑櫻はまた格別」と紹介されており，奥丹後地方において東山公園は桜の名所として定着しつつあった様子がうかがえる。

加えて，5 月 23 日には同じく大阪朝日新聞京都版には，「咲き誇る藤」と題して，図－10 と同じものと思われる藤棚の写真が掲載されている。これらの結果，「櫻に次ぎ藤の名所と賞観さる々に至つた」と記述している[38]。

**（5）管理運営形態からみる東山公園**




図－16　東山公園露店食堂（料理屋）の広告

顛末記には，1930 年 4 月の観桜が実施された際には「未曾有の殷賑を極め名實公園の價値は立派に顯はした　臨時料理屋まで出店して都市公園の眞似もしたり兎にも角にも名實を供へしめた」[39]と記述がある。さらに，東山公園の露店食堂の広告物が挿入されている（図－16）。公園内での飲酒・飲食を伴う花見を積極的に広告しており，啓蒙的な都市公園というよりも，飲み食いを許容し，花見や散策など地域住民の慰労の実態に即した公園であったといえる。実際，聞き取りからは娯楽の少ない地域住民にとって東山公園での花見は印象深い体験であったとされる。また，日常的な慰安，遊び場としても機能していたこと[40]，水谷や谷源蔵自身によって管理が行われていたことが判明した。

**（6）小括**

東山公園は稲荷山山麓に設置され，間人や日本海への風景を体験できる場所であった。稲荷山を背景に園地が整備されており，下の台とされる広場には，瓢箪池，藤棚が配され，桜を中心とした植樹がされていた。また，10m 前後の高低差をもつ中の台には四阿が配され，桜や藤棚を見下ろす風景や，下の台とは異なった俯角の眺望が提供されていた。他に季節ごとに花を楽しめる植栽が設えられていた。さらに，飲食を伴う花見の場を提供しており，新聞に掲載されるなど地域の名所として機能していた。

## 4．東山公園に対する谷源蔵の考え方とその背景

**（1）1920 年代の京都・大阪の公園概況**

谷源蔵は，東山公園の建設にあたり水谷に京都の古刹を視察させ，さらに京都，大阪，海外の公園を知っていると述べる。谷源蔵の公園への考え方を論じるうえでも，当時の京都・大阪の公園状況の素描が必要と思われるため，開園式の 1925 年までに開設された公園を表－3 に示した。

3 章でみたように，東山公園は西洋風の近代都市公園を範としていないように思われるが，例えば大阪市の中之島は，1915 年からは運動場や大花壇，噴水池の整備がされるなど，東山公園構想期には既に近代都市公園としての姿を現していた[41]。また，岡崎公園など博覧会由来の公園があり，その 1 つの天王寺公園では第 5 回内国勧業博覧会時（1903）には，正門入り口から長方形の花壇 3 個が軸線上に並べられ，プラタナスが配植されるという整形式の植栽配置であった。公園として開園の際にも，美術館とセットにされたフランス式の唐草模様の花壇が作られていた[42]。このように，1925 年以前の京都・大阪においても西洋風の都市公園は既に存在していた。

**（2）谷源蔵の公園への考え方**

東山公園の経緯から谷源蔵の公園への考え方を考察してみたい。まず，着目したい点は，大前提に地域社会への貢献があったことであり，「彼是と考究せしも多くは一長一短」とあるよう，複数の選択肢の中から公園が選択されていることである。「銅像碑石の建立は私事だ　その對照として公的の計劃なくては郷土に済まないとの誠意の發露が東山公園と現實した」[43]とある。このように，

**表－3　1926 年までの京都・大阪の公園概況　補注 10）より**

| 開設年 | 公園名 | 所在地 | 開設年 | 公園名 | 所在地 | 開設年 | 公園名 | 所在地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1873 | 浜寺 | 堺市 | 1898 | 箕面 | 箕面市 | 1923 | 桜之宮 | 大阪市 |
| 1873 | 住吉 | 大阪市 | 1909 | 天王寺 | 大阪市 | 1923 | 八幡屋 | 大阪市 |
| 1873 | 瓜破駒ヶ池 | 大阪市 | 1909 | 大浜北 | 堺市 | 1925 | 福島 | 大阪市 |
| 1874 | 加美長沢 | 大阪市 | 1918 | 日本橋 | 大阪市 | 1886 | 円山 | 京都市 |
| 1880 | 大浜 | 堺市 | 1919 | 西九条 | 大阪市 | 1904 | 岡崎 | 京都市 |
| 1891 | 中之島 | 大阪市 | 1923 | 扇町 | 大阪市 | 1906 | 嵐山 | 京都市 |

谷源蔵は東山公園の設立に際して，公園の意味を地域社会において公共性を持つものとして捉えていたといえる。

次に着目したい点は立地である。谷源蔵は公共的利用という観点から間人町の中心部を探したものの，公園としての適地がなく断念した。稲荷山の選択理由は公園としての相応しさであり，その相応しさとはすなわち景勝地であるということであった。顛末記には開園式の招待客 10 名の祝辞が掲載されているが，立地に拠る日本海への眺めがもたらす景勝の地として東山公園を称賛する記述が多くの招待客に見られた。例えば，蒲田長治の「左ニ稲荷愛宕ノ小山ヲ控ヘ右ハ帆汽船西ニ馳駆する廣茫たる滄海を望み膝下に間人町の大部ヲ集メ眺望絶佳ナル自然ノ風景ニ富ム斯ノ地」[44]などである。日本海や間人町を望む古写真が残されており，視点場として優れた立地であるといえる。すなわち，景勝性を重視するという谷源蔵の考え方があったといえる。

続いて立地と連接する公園の意匠に着目したい。谷源蔵は，庭園式を選択したと記述する。また，造園技手には京洛の古刹を視察させている。当時の京都・大阪には洋風の都市公園が存在しないわけではなく，また谷自身海外の公園を見聞していると述べる。例えば，天王寺公園に植栽されたプラタナスは，『植物目録』において公園に適するものとして示されているが，東山公園には使われていない。谷源蔵の考える公園にそぐわなかったのであろうか。招待客も「豊富ナル奇石　奇石ニ種々ノ樹木ト草花ヲ配列シ其趣向ノ深遠優雅ナル」[45]という記述があるように，庭石に着目するような様子がうかがえる。現存しないものの池泉や鶴と亀の置物が設えられ，大量の庭石が使われており，谷が言うところの庭園式とは和風を示すものとして解してよいと思われる。資料の限りからは谷源蔵が意図して洋風の都市公園とは異なる和風の公園を建設したかは断じ得ないが，東山公園は洋風とは異なる和風のものであったといえる。

顛末記の「京洛の名所古刹を視察」との記述に従えば東山公園は京都市内の公園や社寺の影響を受けたと思われる。必ずしも公園のみが視察の対象となったようではないが，当時存在した 3 つの公園からまず円山公園に着目したい。円山公園は 1909 年から 1914 年にかけて区域拡張など，公園整備が始まっていた時期であった[46]。この際に，7 代目小川治兵衛は琵琶湖疎水を引き入れ，滝や流れ，ひょうたん池などの池泉を設え，樹木，芝生の植栽を行ったとされる[47]。また，噴水も設えられており[48]，東山公園の記述にみえる「瓢箪池，清瀧，噴水」などと合致する。また，円山公園のような飲食を提供する殷賑の地としてのイメージが念頭に合ったからこそ，「料理屋まで出店して都市公園の眞似もしたり」との記述があったと考えられる。このように空間構成や利用状況の点で，円山公園と符合する点は多いといえる。

とはいえ，眺望や池泉が設えられ，花見の場となる遊覧地型の公園は円山公園に固有のものではない。例えば，東山公園と同時期の私設公園に関して言えば，郷土への貢献が目的とされて作られた新潟県見附市の新田公園[49]や群馬県桐生ヶ丘公園においても眺望の地に池泉が設えられ，桜などが植栽されており[10]，東山公園と共通する。当時の地域住民への慰安の場を提供するには，飛鳥山などに通じる眺望性の高い遊覧地という古典的な空間装置のセットが通念としてあり，それが採用されたと考えられる。

白幡洋三郎[50]は日本の公園の特徴を欧米都市への追従，行政主

導であったとし，日本的屋外レクリエーションとそれを支える空間と公園とのギャップを論じつつ，本来的には公園は庶民の必要性に対応する地域の装置であるべきとの見方を提示している。この見方に従えば，東山公園は欧米都市を規範としない非行政主導である点において一線を画す。さらに東山公園の設立にあたって，谷源蔵は公園を作ること自体が目的でなく，地域への貢献が念頭にあった。このため，地域社会の需要や実態に沿った空間が公園として用意され，かつ実際に地域の装置と機能していたとの評価が可能であろう。

## 5．おわりに

本研究では大正・昭和初期における東山公園の設立の経緯や意図，空間の意匠と管理運営形態を検討し，その上で谷源蔵の考え方について考察を行った。

東山公園設立の直接的背景には，地域社会への貢献という谷源蔵の考えがあった。その立地の選択としては，旧間人町の中より日本海を望む眺望への視点という景勝性が重視されていた。開園式の招待客も景勝性を称賛しており，この眺望は東山公園の特徴であった。当時，洋風の公園の萌芽は既にあったが，東山公園は谷源蔵が庭園式とする和風公園であり，瓢箪池や藤棚，多数の庭石などが設えられていた。植栽樹木は桜やカエデが中心であり，花見の際には料理店を出すなど飲食・飲酒を許し，桜の花見や散策などの地域住民の慰労の場として，東山公園が提供されていた。新聞報道にあるよう奥丹後地方における名所として知られており，眺望性の高い遊覧地という古典的な屋外レクリエーションのための空間装置を踏襲したといえる東山公園は，地域への貢献という谷源蔵の目的を達していた。また谷源蔵は，地域所縁の伝説・歴史の記念碑を建立しており，東山公園には地域のメモリアルな場所としての意味の付与があったと考えられる。

私人による社会貢献は得難い行為であることは他言を要しない。そういった篤志家の志を地域へ投下することは市民型社会の成熟のために重要であり，したがってそれらを具現化する手段もまた重要である。谷源蔵は公園による地域貢献を志向したのではなく，地域貢献の手段として公園を選択している。つまり，その背景には公園には地域へ貢献し得る公共的な社会資本としてのイメージが付与されていた点を指摘でき，この点は現代において公園の可能性を考える上でも示唆的である。さらにいえば，太政官公園はそういった公園イメージの生成に資していたのではないだろうか。

前述の白幡は地域の文化装置としての公園を理想に求める。すなわち，地域が支えて作り出す恒久的な装置としての公園である。東山公園は，谷源蔵により地域の文化装置となるべく用意された空間であり，一定程度機能した。しかし現在，広場や藤棚があった下の台は図－6 のように宅地化していることをはじめ，中の台より上も藪化が進むなど辛うじて痕跡を留めるのみとなっている。聞き取りの範囲においては，1952 年の谷源蔵の没後管理者が不在となったこと，さらに 1963 年の通称三八豪雪によって，荒廃していったとされる。1954 年に刊行された町史には東山公園の紹介が写真付きであり，「風雅は将に観光間人の第一に数うべし」とされる[51]。しかし，1976 年の丹後町史[52]には，東山公園への言及は確認されず，この頃には既に荒廃していたと思われ，聞き取りの結果と一致する。

このように，東山公園は恒久的なものには成り得なかった。制度で守られたもののみが，造園学の対象でないことは自明である。地域貢献の手段として設立された公園を，地域の資源としてマネジメントするための手段が必要であったことを東山公園は示しており，その点において行政に寄付され存続した新田公園などとは対比的であって，その手段の考究は今後の課題である。

さて，本研究では一公園の事例的蓄積を試みてきたが，公園史の拡充のためには公園という概念自体への認識の蓄積もまた重要であろう。したがって，公園を保健衛生に資するレクリエーション空間とする認識，公園とは遊園を市民向けに開放したものとする認識が東山公園開園式の招待客にあった点について，この両者が既に公園を考究する中で関心の対象[53]となっていることもあり，最後に附言しておきたい。

謝辞：調査にあたって，中江忠宏氏，浅田武夫氏，清水政夫氏，中江敏江氏，中江宏樹氏には大変お世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

## 補注及び引用文献


1) 現在の京都府京丹後市丹後町間人である。
2) 高橋理喜男（1975）：太政官公園の成立とその実態：造園雑誌 38(4), 2-8
3) 丸山宏（1994）：近代日本公園史の研究：思文閣出版,65-81
4) 小濱淨鑛（1924）：我が國公園の現状：都市と公園：成美堂書店，1-22
5) 野間守人（1921）：本邦公園の成立を論して現状に及ぶ：農学会報.(220), 1-68　例えば，神奈川県の共栄園は田川平三郎によるものである。
6) 関倫三郎（1919）：全國公園調査（愛知縣の部）：庭園 2(1),26-28
7) 上原敬二（1924）：都市計画と公園：林泉社, 36-37
8) 田村剛（1919）：我が造園界の改造：庭園 1(2),1-2
9) 本研究では私人が個人で設立した公園を示す。会社や各種団体の寄贈は含まない。
10) 日本公園百年史刊行会（1978）：日本公園百年史-総論・各論-：日本公園百年史刊行会,690pp
11) 佐藤昌（1977）：日本公園緑地発達史：都市計画研究所：上巻,pp698, 下巻,547pp
12) 当然，ノンブル・頁数の記載はないが，word ファイル化時に顛末記のレイアウトと対応させ頁数を付した。以降，顛末記より引用には，この頁番号を記載する。
13) 上谷正男・広瀬幸二郎・宮川督三編（1993）：谷源蔵と間人民族の研究：谷源一,228
14) 現地に詳しい清水政夫氏の案内のもと現地踏査を行った。Garmin 社 eTrex® 20xJ で得た GPS ログとデジタルカメラで撮影された写真をタイムコードで統合し，場所の記録・特定を行った。
15) 間人村：日本歴史地名体系：平凡社：ジャパンナレッジ（2016.8.26 参照）http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30020260000278100
16) 町史などには 4 男とされるが，顛末記や聞き取りの結果，5 男とした。
17) 丹後町編（1976）：丹後町史：丹後町，222
18) 丹後地区広域市町村圏事務組合（2011）：近世・近代における郷土の先覚者：丹後地区広域市町村圏事務組合 2 市 2 町政策連携会議調査報告書,29
19) 顛末記,15
20) 顛末記,17
21) 聞き取りの結果，水谷政吉は間人で造園業を営んでいた人物であり，昭和 40 年ごろに広島へ移住したことが分かった。
22) 顛末記, 19
23) 卜部勝彦（1990）：伊丹台地北部における植木生産地域の変容：宝塚市下中筋地区・伊丹市荒牧地区を事例として：経済地理学年報 36(3), 207-225
24) 小寺駿吉（1967）：造園会の動向と植木生産について：愛知県尾張事務所植木振興資料 3：公園史と風景論 小寺駿吉論文集, 286-291
25) 渡部泰輔編（1927）：全国著名園芸家総覧：大阪興信社営業所,87
26) 図－3 の公園区域は 5,514.4m² である。作図・計測は ArcGIS10.3 で行った。
27) 中江敏江氏所蔵のものを閲覧・撮影し入手した。顛末記にも写真の記述があり，今回入手したものはその一部であると思われる
28) ただし，瓢箪池の存在を知る清水氏の案内がなければ，特定不可能であった。
29) 花王園植物場（1928）：植物目録：花王園植物場, 57pp
30) 花王園の『植物目録』でもこの表記である。
31) 顛末記,124
32) 花王園植物場（1928）：植物目録：花王園植物場, 13
33) 当該地域の 2 万 5 千分の 1 の地図は 1972 年まで発行されておらず，1903 年発行の 5 万分の 1「網野」では，資料的裏付けは不可能であった。
34) 顛末記, 94
35) 聞き取りの範囲においては，この地名は不明であった。
36) 顛末記, 119
37) 顛末記, 126-127
38) 顛末記, 156　ただし顛末記では，それぞれ 4 月 10 日，5 月 25 日と日付が異なる。
39) 顛末記, 125
40) 聞き取り時には，1958 年に東山公園で撮影された写真と共に当時の記憶について拝聴した。入口碑，間人への眺望，相見濱子像を背景とした写真を確認した。
41) 日本公園百年史刊行会（1978）：日本公園百年史-総論・各論-：日本公園百年史刊行会, 590-561
42) 佐藤昌（1977）：日本公園緑地発達史 下巻：都市計画研究所,346-347　ただし細部の設計では景石，石灯籠など和風のものも据えてあり，洋風で終始したのではないともされる。
43) 顛末記, 79
44) 顛末記, 70-73
45) 顛末記, 68-70
46) 出村嘉史・川崎雅史（2003）：近代京都の円山公園における景観構成の分析：土木学会論文集 (744), 93-100
47) 京都市（2015）：名勝円山公園保存管理計画,14-15
48) 京都市（1929）：京都：京都市, 72-73
49) 見附町教育会編（1940）：見附町郷土読本：見附町教育会,72-75
50) 白幡洋三郎（1993）：日本文化としてみた公園の歴史：日本文化としての公園：八坂書房, 33-42，白幡の官と民をやや単純に対置させる見方に全面的に同意するものではないが，考慮すべき考え方である。
51) 京都府間人町役場編（1954）：町政三十五年史：京都府間人町役場,111-117
52) 丹後町（1976）：丹後町史：丹後町,743pp
53) 小野良平（2003）：公園の誕生：吉川弘文館, 216pp